



芽を愛する心

倉 橋 惣 三

春信既に頻りになつて、花を訪わないものはない。春の聲音離外に近づいて、出でゝ迎えないものはない。待ちかねて春にゆき遇うて芽を愛するものこそ、初めて真に春を愛するものといえよう。

嫩芽は謙黙して自らを顯わさない。茂りの下に匿れ、土に埋もれて自らをも知らない。紅唇微かに綻び、膚の色滑かなるに到つても、少しも己れを誇示しない。たゞ淡、たゞ素、敢て人の目を惹かない、たゞ純、たゞ鮮、未だ春塵のよごれを知らない、可憐ながらに崇美の春の子である。

しかも、この春の子の、自然の小さい子として、内に蔵する生長の力は崇美というよりも壮美といふべきである。享樂とか耽美とか、春に酔うものゝ常套の言葉であるけれども、この小さい春の子に対しては、驚悸と驚駭との外はない。春に驚くという言葉のみが、この小さい春の子の驚くべく偉大な力への言葉にあたる。

幼児を連れて、早春の野に出よう。そこには、まだ、むこりから招くに値する花の色もない。きのうからきようへ、きようからあすへの、生長の芽があるだけである。うつかりして踏みつけてはならぬ。心なく摘みとつてはならぬ。先づ細心に護らなければならぬ子らである。そのうえ、花としては知らぬものもない名を、未だは多くもつていないが、またその生長の力も一日二日にしてはあらわれないが、いつのまにか変化し生長して、その移行と展廻をさえ進るに苦しませるが、この一つ／＼の小さきものには微細の探求によつて、各々の個性が発見せられる。小さいけれども皆それ／＼の特色に活きていることに驚かされるのである。

芽を愛するは花を賞せんがためだといふは否むべきことではない。しかし、芽を愛するは花の約束によるのみであるるか、真に芽を愛する心はこの小さなものに見られる今日の春を愛するのである。或は大輪の花の形も期待せられる。艶美

の花の色をも、期待せられる。けれども、それは、明日の希望である。今こゝに見る小さい芽には、その小さいものながらの愛らしさがあり、貴さがあり、生命の驚異、拝みたささえもあるのである。この心をもたないものは芽を撰ぶことを知つて、芽を愛することを知らないであらう。芽を価値づけることを思うて、芽を愛することを思わないであらう。芽を愛するものは、芽を育てずにはいないであらうけれども、そうはいわれるものゝ、必ずしも、育てるためにのみ愛するのでない。野に出でて小さい芽に遇うものゝ心は、先づ彼等の今を愛せずにはられないのである。

愛するものにとりて、その親しさは訪ねぬ日にいやまさる。林は広く、同じような木立の路に迷う。殊に浅春の林はまだ枯木立である。木がらしに梢の葉も落ちて、どれも同じ淋しい姿である。それを己のが姿と見くらべながら節を曳きながら、あの小さい芽はどこだつたかとたづねあてるのも、此頃の感興である。そこは低い灌木叢に固まれた枯芝の日だまりになつてゐる。どこかで親しげによぶ声がする。あたりを見まわすと、見ちがえるように大きくなつた、あの芽である。おこゝにかと近づけば、右にも左にも同じような芽がむらがつて来て、そここゝから声をかける。馳け寄つて来る可愛いいけはいさえる。叢の外の風を遮ぎつて、ぽかぽかするその日だまりは心の奥まで温かにぬくめられる心地が

する。必ずしも、きようはもう花になつてゐるかしらは思わないし、芽の無邪氣のまゝをなつかしく思つたりするのである。

越えてその翌日は雨になつた。あの野中の日だまりを思い出し、あの芽達はどうしてゐるだろうかと、思いやりもする。春雨とよぶには、まだ雨足が強い。風さえ吹き出して、あの灌木叢も荒れていることだろうとも思われる。しかし、花ぞつたら散るかと思はれる心配は起らない。この雨、この風にきたえられながらにきようもあの小さい日だまりに、安らかに護られてゐるだろう芽の幸福を思つて、と安心する。そうして、芽は芽としての幸を充分楽しんでくれと心から祈りもするのである。

× × ×

× × ×